

中長期目標 (学校ビジョン)		夢や希望に向かい 自分らしく輝いて たくましく生きる力を育む			今年度の 重点目標	一人一人の生活や可能性を広げる多様な学びの推進 ・安全・安心な教育環境の整備・組織体制 ・地域連携、保護者連携の強化 ・校内組織力の強化と業務改善	
年 度 当 初							(9)月
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
各学部の取組	小学部	自分らしさを発揮し、願いを抱き意欲的に学ぶ授業づくり	・児童の実態に大きな幅があり、重度の児童も多い。個々の実態やニーズを適切に把握する難しさもあり、関係機関からの助言や、教員個々のノウハウを生かした研修を積み重ねながら職員間で情報共有し、実践の質を高めていく必要がある。 ・学部通信や学部懇談で進路に関する話題を交えて伝えたり進路に関する情報を提供したりしている。 ・各クラスの授業実践を共有する機会として、実践紹介や使用している教材、教室環境を紹介し合う勉強会や、事例を交えた進路・キャリア研修会を開催し、職員間で情報を共有したり、キャリア教育について考える機会を設定したりしている。	児童の実態を保護者と共有し、次のステップ(願い)に向けて適切な目標設定、支援・授業を行っている。	・児童の実態やニーズについて保護者から細かく聞き取るとともに、意見交換をしっかりとしながら教育支援計画の作成にあたり、保護者や関係機関と情報共有する。 ・懇談や参観日などで、継続して保護者に進路やキャリア教育に関する例や情報を提供していく。 ・視覚障がい、聴覚障がい、発達障がい等、経験者のノウハウを生かした研修や、実践の中で児童の反応を、どのように捉えるのかといったPDCAサイクルの視点で実践紹介しあう機会を月1回程度設定する。	C	・研修会を継続するとともに、学習指導や支援の充実、児童理解につなげるために、他学級や学習グループでの学習を広げ、目標や支援方法、学習の振り返り等しながら、児童について語る場を設ける。 ・キャリア教育参観日に向け、学部で話し合う機会を設け、授業実践を行うと共に、日々の学習の中での子どもの姿をホワイトボードを活用して紹介したり学級通信を回覧したりして共有する。 ・専門機関との連携(支援会議や施設支援等)で得た情報や学びを学部全体で共有できる機会を設定する。
	中学部	自己実現に向けて、一人一人の実態や課題に応じた授業づくり	・各教科の理解度や障がいの程度など、生徒の実態差が大きい。 ・生徒理解のために単一会や重複会を行っているが、授業予定や連絡事項について話し合われることが多く、授業を通じた生徒の変容や各授業の評価・改善について話し合われることが少ない。 ・教科指導や自立活動の専門性向上、効果的なICT活用、実態に応じた教材・教具の活用など授業力向上に向けた努力が必要である。 ・進路学習について、様々な状況に応じて学習内容を考え、計画的に実施することが必要である。	・職員、生徒の8割以上が生徒自身ですべきことを考え行動することができたと感じている。(単一) ・職員、保護者の7割以上が、生徒の実態や生活年齢に応じた学習や適切な集団学習の工夫ができたと感じている。(重複)	・日々の実践につながる学部研修を行う。また、定期的に単一会や重複会を実施するとともに、教材の是非や各教科の生徒の変容などを話し合う時間を設定する。 ・生徒がすべきことを自分で考えられるよう、指導と支援、受容と許容のバランスに留意する。 ・生徒一人一人の病気や障がいに応じた適切な支援を行うために、保護者・関係機関との連携を深める。	C	・単一会や重複会において、各生徒の授業での様子や変容について語る時間を作る。 ・計画的に学部研修を行い、障がいについての理解や自立活動の専門性を高められるようにする。
	高等部	生徒のキャリア発達を支える授業づくり	・学部会・単一会・重複会の情報共有、また、生徒の実態把握や授業の工夫・充実に向かう体制ができてきた。 ・昨年の取り組みを継続しながら、生徒が自分の力を発揮する活動につながる授業づくりに努めることが必要。	・的確な実態把握、生徒理解のもと、生徒が自分の力を発揮できる授業づくりに努めている。	・キャリア発達、生徒一人一人のキャリア教育目標について共通理解をする機会を設ける。 ・単一会、重複会や子どもを語る会、掲示板利用等で情報交換を行い、生徒の実態把握や授業の充実(教材の工夫や体験・集団活動の工夫・ICTの活用)に努める。 ・体験学習や集団学習について、3年間の学びに継続性を持たせることで見直しを持って計画・実施できるようにする。 ・主事、副主事が中心となってニーズを把握し、職員研修(全体、単一会、重複会)を実施する。	・学部会等で、生徒の実態把握やキャリア目標の共通理解はできた。ミニ研修会を2回設定し、具体例を交え個々の実践に生かせるようにした。それぞれの立場で成果が見られる反面、ニーズの吸い上げや実践の振り返りが十分できていない等の課題がある。個々の成果や課題を出し合い、次に活かしていく工夫が必要である。 ・主事・副主事を十分に活用できなかった。学部研修、単一会や重複会のさらなる連携・充実が必要である。	C
一人一人の生活や可能性を	教務部	各種計画類の様式整理	・昨年度個別の教育支援計画、個別の指導計画、年間指導計画等の様式の見直しを行い、今年度から新様式を運用することになった。作成の流れや学習へのつなげ方、具体的な進め方等についてはまだ浸透していない部分があり、一つ一つ確認をしながら進めていく必要がある。 ・重複学級においては、指導計画において今年度から教科ごとの目標設定、評価となり、より教科を意識した授業づくり、評価をしていく必要がある。	・個別の教育支援計画、個別の指導計画、年間指導計画の作成や具体的な流れについて整理され、スムーズに運用されている。	・新様式での作成の意義について確認しながら、個別の教育支援計画、指導計画、年間指導計画作成の流れや手順を具体的に示していく。 ・目標設定や評価等について、随時確認して共通理解をしながら進めていき、各種計画類がより使いやすいものとなるよう必要に応じて改善を図っていく。	C	・職員から出た質問や要望等について分掌部会で検討し、より使いやすいものになるように修正や共通理解を図っていく。 ・今後も継続して書き方の流れや手順を具体的に示していく。
	まなびのプロジェクト	授業づくり	・とりよう学びのプロジェクトは、それぞれの分掌や教職員が児童生徒の学びの充実を図りたいという思いをより効率的、効果的に実現するために検討を行う。(月1回程度)	・各研修会や書き物のスケジュールの情報をまとめて職員に提示する等の工夫をし、職員が働きやすくなりやすくなる。 ・学校裁量予算指導充実費戦略事業にプロジェクトで検討した内容を踏まえ、予算化を図る。	・全分掌の参加メンバー構成の見直し ・研修会の持ち方や各分掌事業の調整を行う。 ・予算要求等の基本的なところから参加者と一緒に考える。 ・「初めての先生でもすることが分かる」教材研究や研修の時間が持てる」等の働きやすい学校に向けてトリセツの充実を図る。	C	・学校経営の重点に即して、事業内容と担当一覧を作成し、職員会で明示した。また、研修会の年間予定も作成した。 ・戦略事業の予算案を電子会議システム、SWOT分析を活用し、作成した。
	教育企画部	自分らしさを實現するキャリア教育の推進 児童生徒会活動の活性化	・年度当初、進路指導主事が各学部で進路・キャリア教育に関する研修を実施し、共通理解を図っている。今年度からキャリア教育の評価がキャリアパスポートや個別の教育支援計画の評価に代わる。 ・様々な制限の中で児童生徒が活躍したり、交流したりできる機会が減少したが、委員会活動やわくわくフェスタに関して生徒主体の意見が上がってきている。今年度は初の児童生徒役員選挙が実施となる。	・キャリア教育に関する学び合いを通し、7割以上の教職員が他の学級や学部の児童生徒の取組や変容、成長を認め合う声かけができる。 ・児童生徒会活動に関して「次は～したい」「自分も～してみたい」等と新たな夢や目標を持つ児童生徒が増え、次期役員候補者が出る。	・キャリア教育の視点や発達段階の目標を確認しやすい表にまとめ、個別や集団活動で育てたい力の意識付けや職員間や保護者との共通理解を促す。 ・学部主事や進路指導主事等と連携し、研修内容の共有や学部間の研修、キャリアパスポートを見合う機会等を設け、学び合いや情報の共有を図る。 ・児童生徒会に関するプレゼンや動画を作成し、選挙への参加を促したり、児童生徒会への関心を高めたりする。 ・文化的行事を児童生徒会活動と結びつけ、主体的な活動の機会の保障、チャレンジへの認め合いにつなげる。	・進路指導主事や主幹教諭の協力を得て、キャリア教育の充実をテーマに卒業生インタビューを交えた職員研修を行った。グループ協議では、実践のポイントや本校の視点について学部間での意見交流を促し、掲示板で情報共有を図った。 ・児童生徒会選挙への関心をプレゼンや動画、本物の選挙物品の活用等で高め、全校児童生徒の参加、4名の児童生徒役員を選出につなげた。児童生徒会活動として、新しい学校のキャラクター作成、朝の挨拶運動が行われた。	C

広げる多様な学びの推進	情報教育部	ICT活用(一人1台端末)	<ul style="list-style-type: none"> ・高等部1年生・2年生が、1人1台端末の環境の導入がスタートする。現在その準備を整えている。 ・ICT機器を用いることで、学習意欲や学習理解度が高まる場合があると考えられるが、現在、ICT機器を学習で活用する方法は、職員によって差がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1人1台端末の環境において、児童生徒がルールを意識した上で主体的な活用をしている。 ・ICT機器の活用において、ただ使用するだけでなく、児童生徒が主体的に活用する場面があったり、学習の困難さを手助けしてもらったりするような活用が学習の6割以上でなされている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・分掌内で機器の使い方を学び、各学部へと広げていく。 ・新しい機器の使い方を掲示板に載せるなどして、使い方を周知していく。 ・ICT機器が活用しやすい環境整備と支援体制に努める。 ・ICTサポート支援事業との連携を密にし、ミニ研修を開いたり、授業支援を進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒にルールを提示し、そのルールを守ってiPadを使用しようとする様子が見られた。 ・教科によっては、デジタル教科書や活動に応じてICTの教材を作成した。 ・ICT機器を用いることで、学習意欲や学習理解度が高まることが多かった。ICT機器を学習で活用する方法や活用の頻度は、職員によって差がある。 ・分掌部内で情報の仕事内容を共有できるよう、ICTサポート支援事業との連携や、ミニ研修を開いた。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が主体的に使っている場面を教員間で共有する。 ・教員がICT機器を使ってみたく思えるように、ICT支援員と連携しミニ研修を開設する。 ・分掌内で機器の使い方を学び、各学部へと広げていく。
	自立活動部	授業づくり 病弱教育の強化 エキスパート教員の活用	<ul style="list-style-type: none"> ・肢体不自由・病弱教育の基礎的な知識や実技について全職員で毎年確認するとともに、アンケートを参考に実践に結びつきやすいテーマをお役立ち勉強会等を活用して計画的に研修していたが、今年度は実施しない。また、他学部や他学習グループと授業について意見交換する機会がない。 ・経験年数、個々の専門性は様々である。基礎的な知識を押さえるとともに、身体面や認知面の指導等、職員の専門性向上を引き続き図る必要がある。また、教材・教具の活用の仕方等、職員間で情報を共有する機会が少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・校内の自立活動関連教材を自立活動教材室に集め、目的、段階別に整理する。 ・自立活動室やスヌーズレン室の物品の使用方法を一覧にまとめる。 ・写真データを活用し、様々な学習グループの様子を定期的に紹介したり、参考になる資料を紹介したりすることで授業づくりの参考にできるようにする。 ・Co-MaMeを活用できるよう研修や勉強会を設定する。 ・研修後のアンケート等で寄せられたニーズに対して、ミニ勉強会「ちょこっとLab.」や自立活動通信「MANABI」で伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自立活動教材室に自立活動関連教材を集めた。目的や段階別等、整理の方法は今後検討していく必要がある。 ・自立活動室やスヌーズレン室は、担当者を中心に物品の整理や使用方法の周知(使用法や目的をファイルにまとめて一覧にする)等を進めている。 ・授業づくりに関する外部講師による研修会や、校内職員の実践紹介等をミニ勉強会「ちょこっとLab.」で行った。授業づくりについて職員同士が話し合ったり教材を考えたりする機会を持つなどして実施している。 ・夏季セミナーでCo-MaMeの活用に向けた研修を行った。事後アンケートから、客観的実態把握と共通理解のためのツールとして本校に導入すること概ね肯定的であった。 ・アンケートの要望に応える形で自立活動通信「MANABI」を発行した。また、他校の自立活動通信を掲示板に掲載し本校の実践の参考となるようにした。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・自立活動教材室の活用に向けて、教材整理の方法を検討し、職員に周知する。 ・分掌部会後に自立活動室やスヌーズレン室の物品整理、チェックを行う。 ・授業づくりに役立つような校内資源(物品、実践)の蓄積に向け、今後も継続して職員のニーズに応じた研修を企画していくとともに、教職員が資源を活用できているかアンケートを実施し、改善を図る。 ・児童生徒の実態に応じてCo-MaMeを実態把握のツールの選択肢とし、幅広く活用してもらえるよう引き続き研修等を行い周知をしていくとともに、使いやすくなるよう工夫改善していく。(実態把握ツールの整理等) 	
安全な教育環境の整備・組織体制	保健安全部	○児童生徒が安全に快適に学校生活を送ることができる環境整備と体制づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒヤリハット事例の報告は、掲示板や学部会で行うことで、教職員の意識の向上につながっている。大きな行事の時期に、レベル1以上の件数が増加した。また、ヒヤリハットの報告をするのは気まずいという雰囲気がある。 ・新型コロナウイルスの状況により、学校全体での訓練ができず、学部や学習グループでの実施になった。しかし、訓練の前後の準備や打ち合わせ、反省から挙がった諸問題の解決に向けて、避難用具や防犯用具の充実を図ったり、防災委員会と連携を図ったりした。 ・医療的ケアのある児童生徒の担任・学部主事と看護師が話し合い、双方の目標や方策を共有し、支援している。 ・教職員アンケートの「給食を活用した指導を計画的に実施できたか」の問いに対して肯定的な回答が70%以上ある。 ・教職員アンケートの「給食を活用した指導を計画的に実施できたか」の問いに対して肯定的な回答が52%であった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・レベル0の事例報告数を増やすことで、レベル1以上が減少する。 ・防犯体制および災害時の避難経路や避難場所、救急体制が確立している。 ・教職員と看護師の双方がそれぞれの専門性を発揮し、児童生徒の心身の安定や学習への積極的な参加を通し、児童生徒の成長・発達を最大限に促すことができている。 ・教職員アンケートの「給食を活用した指導を計画的に実施できたか」の問いに対して肯定的な回答が70%以上ある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒヤリハットの報告を、掲示板や学部会で行う。 ・大きな行事の前に、口頭でも全体への意識づけをはかる。 ・レベル0の事例報告を増やす工夫をする。 ・外部機関と連携をとりながら学校全体での各種訓練を行い、避難方法を全体で共有する。また、保健安全部会で協議したことを防災委員会に報告し協議したり、設備の充実を図る。 ・外部研修や校内での研修、ケアトーク、医療的ケア等を通して教職員と看護師との連携をとりながら児童生徒の情報共有に努める。 ・献立に関するひとことメッセージや、食育動画など給食指導のための資料提供の充実を図る。 ・食育関連行事(食育月間・給食週間)を実施する。 ・委員会活動(教育企画部)と連携した指導の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒヤリハットのレベル0の報告も大事であるということ、掲示板などで伝えたことで、レベル0の報告が4～7月に12件(昨年度6件)と増加した。ヒヤリハット川柳の取り組みを始めた。集まった川柳を掲示し、意識付けにつなげている。 ・防犯訓練では鳥取警察署、火災避難訓練では鳥取消防署と連携をとりながら訓練を行い、避難方法を全体で共有した。また、その中で必要物品を確認したり、補充したりした。 ・中央病院への避難訓練を実施した。 ・防災委員会との情報共有した。 ・ケアトークで使用する個人シートを共有フォルダに保存して活用したり、看護師一担任間で情報を交換したりして、児童生徒の情報が共有され、体調を整えて学習に向かえるようになった。 ・各学部の行事について、事前のケアルームとの連絡調整が不十分なきがかった。 ・献立の一言メッセージは、誰でも目につき興味関心を持ちやすかった。食育動画等についてはけんこうルームがもっと活用されるよう工夫していく。 ・食育関連行事や委員会活動は充実している。 ・しょくいずの実施、食育動画を生徒玄関で流す等を行って、給食を活用した指導を実施した。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・川柳の紹介も含め、目標達成のための方策を継続する。 ・訓練で分かった問題点を外部機関、防災委員会と意見を交換する。 ・シミュレーション後、防災委員会と連携してより現実的で安全な避難場所の選定、避難方法の検討を行う。 ・各行事の役割分担に医療的ケア担当をつける等の工夫をする。 ・困りごとや希望を複数の委員会と協力して把握し、研修を企画・実施していく。 ・けんこうルームの効果的な活用を考える。 ・まなびのプロジェクトで、「食育、性、人権、キャリア教育等が一つのエクセルシートになると題材選定の時に分かりやすい」という意見があった。視点に応じた目標や学習内容も検討する。
	支援部		<ul style="list-style-type: none"> ・校内支援、教育相談に係る職員間での情報共有を図る仕組みを作る必要がある。 ・SSWの活用は進んできているが、SCとの連携を充実させる必要がある。 ・アフターケアの実施方法についての見直しや卒業生の情報が校内職員へフィードバックされていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的な生徒指導ミーティングの開催。 ・SCによる児童生徒のアセスメント実施や児童生徒の面談回数が増加する。 ・卒業生の情報を職員へフィードバックする仕組みができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・隔週で生徒指導主事、校内支援主任、教育支援コーディネーター、養護教諭等が情報交換を図る生徒指導ミーティングを実施。 ・SCによるアセスメントの実施ができること等の周知やアセスメント未実施児童生徒の抽出。 ・アフターケアの記録を職員に共有する機会を設ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒指導ミーティングに支援部だけでなくSCや管理職を加えて開催することで、効率的に児童生徒の情報共有をしたり連携したりしやすい仕組みが整いつつある。 ・掲示板でSC来校のスケジュールを知らせたり、児童生徒に直接カウンセリングを勧めたりすることで、面談回数が少しずつ増加してきている。教職員にアセスメント用具の紹介や、きもちメーターの導入等、児童生徒の内面の理解を深めるための取り組みを実施した。 ・校内研修や学部会を活用し、卒業生の情報やキャリア等に関して映像等を交え、教職員で共通理解することができた。アフターケアの記録をとりようのトリセツにリンクしているが活用は少ない。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・きもちメーターの活用方法について、支援部だけでなく、保健室とも協力して進める。 ・引き続き、SCと児童生徒との関係作りを深めていくとともに、幅広く相談ができるよう教室に向向してもらったり、気軽に話ができるような場の設定をしたりする。 ・アフターケアの記録について、とりようのトリセツにリンクが貼られていることを教職員に周知するとともに、記録の活用の仕方がわかるようにする。
地域連携強化保護者連	支援部	地域からの相談対応	<ul style="list-style-type: none"> ・就学や進学、転学に関わる相談が例年多く、学校説明会や学校見学、体験入学等の機会を通して、本校について保護者や学校関係者に正しく理解してもらう必要がある。 ・地域の学校から依頼を受けて相談にあたり、複数で訪問したりリモートを活用したりする等、相談対応は充実しつつある。しかし、単発で終わり、次につながらないケースもあり、早期かつ継続的に支援にあたることのできるような工夫が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校説明会や学校見学、体験入学を通して本人・保護者、学校関係者が本校について理解を深められるような丁寧な情報提供と個別に相談できる場を設ける。 ・地域の学校のニーズに応じた研修内容の設定と、困り感に対する積極的なアプローチを行っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・近年の就学に関する傾向から、小・中学校の自閉・情緒障がい学級や知的障がい学級にも研修会の案内を行い、より多くの人に本校について知ってもらう機会を作ったり、早期かつ継続的に相談できる体制を整えたりする。 ・Classroomや研修会等を活用した情報交換の場の設定、新設学級や相談を受けた学級に対してこちらから積極的に連絡を取り、定期的にフォローアップしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の学校に向けた研修会を計画通り実施できたのは良かったが、実施時期や時間等により、参加人数は少なく、本校についての周知や特別支援教育について情報提供が十分にできなかったと言いがたい。ただ、参加者には好評で、情報交換や相談できる場を設けているため、満足度は高いと思われる。 ・直接、地域の学校に向向き、児童生徒の学習の様子を観察したり、困り感をきいたりすることで就学に向けた相談や目標設定、学習についての相談等、継続的に相談を受けるケースも増えてきている。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・長期的には、本校の教育課程や学習の状況等について、地域の学校や関係機関に知ってもらう方法を検討していく必要がある。そのためにも各関係機関との連携を深めていく。 ・地域の先生方が研修会に参加しやすいように、来年度に向けて開催時期や時間、方法についてリサーチ、検討していく必要がある。 ・引き続き、フォローアップ等も含め、各学校への訪問、電話やClassroomを使って、情報収集や相談対応を行っていく。
校内組織力の	総務部	組織の活性化 業務改善 防災体制(災害備蓄など)	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な職種の連携が十分ではなく、協力できる余地がある。教材や文書情報等が整理されていないため、探すことに時間を要したり、活用されていなかったりしている。 ・災害時に避難した際の動きを想定することや、非常食の準備が十分でないことが課題である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な職種間が連携し、年度当初よりも協力する場面が増えている。 ・教材室が定期的に整理されている。 ・文書ファイルやフォルダが定期的に整理されている。 ・災害時に避難した際の動きの想定がされ、非常食の準備が進んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校看護師と教職員との連携について、具体的な方法を検討し、取り組む。 ・教材室や文書ファイルやフォルダの定期的な整理方法を検討し、取り組む。 ・防災委員会で災害時に避難した際の動きの想定について検討する。 ・非常食の準備を進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・医療的ケアコーディネータが中心となって、対象児童生徒一人一人の個人シート(教育支援計画との関連を記載)を作成している。 ・教材室を整理し、物品が使いやすくなった。 ・文書ファイルの整理は進んでいない。 ・地震時の避難について中央病院との協議が進み、より現実的な避難体制に近づいてきている。非常食の準備については進んでいない。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師と職員連携として、個人シートの活用状況の把握や連携の具体例の検討を行う。 ・文書フォルダの問題点の整理・検討を進める。 ・夜9時までの学校待機を想定した調査を行い、必要な備蓄品がそろよう進める。

強化と業務改善	事務部	<ul style="list-style-type: none"> ・災害時用物品の整備・保管場所の整備 ・倉庫・物置等の見える化 	<ul style="list-style-type: none"> ・災害時用物品の整備を進めているが、十分とは言えない。また、実際に持ち出しをする際に適切な置き場所であるとは言えない状況。 ・昨年度、倉庫等の整理を行ったが、職員の異動もあり、物品の保管場所が一部の職員しかわからない。倉庫の中に入らないと何があるかわからない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・災害時用物品の整備、適切な保管場所への設置 ・倉庫等保管物品のデータ化、職員間での共有 	<ul style="list-style-type: none"> ・関係部署と協議し、必要な物品の洗い出し ・災害を想定した適切な保管場所の検討、設置 ・校内物品の保管場所のデータ化 	<ul style="list-style-type: none"> ・現在、保有している倉庫内の物品について、リストアップを行った。 ・災害時の避難計画について、中央病院・体育館への避難の検討を行っていることから、今後、保健安全部等と協議を行う必要がある。 ・旧エレベーター機械室を防災備蓄倉庫として活用するにあたり、必要物品の振り分けを総務部等と協力して進めていくところ。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・保管物品の振り分け ・倉庫内の表示方法を検討する。
---------	-----	--	---	---	--	---	---	---

評価基準 A:十分達成 B概ね達成 C:変化の兆し D:まだ不十分 E:目標・方策の見直し
 [100%] [80%程度] [60%程度] [40%程度] [30%以下]